

増殖し、血管増生がみられ、前頭葉腫瘍は細胞密度が低く、多核細胞・microcyst などの変性所見が主体であり、両腫瘍は生物学的活性を異にし、異時的に発生したものと考えられた。

28. 小児 multicentric glioma の一例

伊藤 靖・森井 研 (長岡赤十字病院)
外山 孚・渡辺 正雄 (脳外科)
金子 博 (同 病理)

multicentric glioma は本邦において比較的稀といわれ、中でも小児例の報告は少ない。今回我々は小児 multicentric glioma の一例を経験したので報告する。

症例は11才女兒。頭痛、嘔吐にて発症。CT にて右頭頂葉に浮腫を伴う enhanced tumor を認めた。神経学的には、軽度左外転麻痺とうっ血乳頭を認めた。脳血管写では右頭頂部は腫瘍陰影がみられた。右頭頂開頭にて腫瘍摘出。組織所見は astrocytoma であった。術後 CT では CE lesion はほぼ消失。放射線療法、化学療法施行し退院したが、後全身けいれんにて来院。CT にて右頭頂部腫瘍の増大と、新たに右前頭葉に plain で、high, CE にて増強効果のある腫瘍を認め、両者の連続性はなく、multicentric tumor と考えられた。両者を手術にて摘出。組織診断はどちらも astrocytoma であった。以上小児 multicentric glioma の一例を報告し、若干の考察を加える。

29. けいれん発作時、CT で確認できなかった膠芽腫の一例

北村 佳久・斉藤 研一 (大船共済病院)
黒瀬 輝彦 (脳神経外科)

症例は、59才、男性。昭和59年4月16日、左顔面からはじまる、Jackson けいれんあり、当科入院する。入院時の CT では、単純、造影ともに異常を認めなかった。経過観察をしていたが、4ヶ月後、CT にて、右側頭、頭頂に脳腫瘍が見つかり、翌日可及的に摘出した。病理診断は膠芽腫であった。以後、放射線治療、化学療法、再手術を行うも、昭和59年10月9日、敗血症を合併し、死亡した。

膠芽腫の CT についての報告は数多くみられるが、発症時 CT で正常と思われた例が、腫瘍の増大とともに CT に出現し、しだいに浸潤していく経過を追跡しえた例は少ない。

大人で Jackson けいれんを初発した場合、早期に脳

腫瘍を確認しうる病態であり、CT による反復した精査が必要であると思われました。

30. 眼球突出および視力障害を呈した巨大な mucocele の一治験例

岩井 良成・岡 伸夫 (富山医科薬科大学)
高久 晃 (脳神経外科)
水越 鉄理 (同 耳鼻咽喉科)
中村 泰久 (同 眼科)

最近我々は眼球突出、視力障害を呈した巨大な mucocele の手術例を経験したので報告する。症例は64歳女性。約40年前に副鼻腔炎の手術をうけ、58年夏頃より徐々に右眼球突出、59年秋頃より右視力低下し、約1ヵ月後には右視力0となった。入院時右眼球的著明な突出と外下方への偏位、球結膜の充血浮腫、右眼瞼周囲の膨隆があり、神経学的には右視神経障害を認めた。頭蓋単純写で右前頭洞と眼窩の拡大を認め、CT scan にて右前頭洞、右篩骨洞、右眼窩内に isodensity の腫瘤を認めた。両側前頭開頭にて根治術を施行し、右前頭洞、右篩骨洞より眼窩内に進展した mucocele と診断された。術後視力および cosmetic にも改善を認めた。

31. 脳梁脂肪腫の手術適応に関する考察

村石 健治・白根 礼造 (東北大学脳研)
亀山 元信・溝井 和夫 (脳神経外科)
鈴木 二郎
旭 方祺 (寿泉堂総合病院)
脳神経外科

稀なる脳梁脂肪腫の2例について報告した。1例は65才女性、無症状に経過したが、脳内出血発作にて当科受診、脳梁脂肪腫を認めたため試験開頭術が施行された。他の1例は3ヶ月女兒、生下時よりの頭皮下腫瘤を主訴に来院、脳梁及び側脳室脈絡叢部脂肪腫の診断のもとに経過観察を行なった。4才時の頭蓋単純写及び CT scan では、石灰化の増強、腫瘍の増大を認めたが、腫瘤の形はほとんど変化なく、脳組織の成長とともに増大したかのような所見が得られた。

本腫瘍は過誤腫の範疇に入るとも言われる良性腫瘍で、約半数が無症状に経過し、症状を呈するものも重篤な場合が少ない。一方、摘出術は困難な場合が多く、文獻報告例31例中20例(64%)で症状の悪化が認められた。我々の小児例の CT 像からは本腫瘍は周囲脳を圧迫しながら増大するとは考えにくく、摘出術は慎重に選択されるべきであろうと考えられた。